フィールドで考える

難民キャンプの市場から

紛争の長期化にともなって、いったん生まれた難民状態が解消されることは少ない。そうした人びとが暮らす難民キャンプとはなにか、一律に定義することも難しい。そういうキャンプには、それぞれの紛争の内容や地域の特性、難民と地域住民との関係を背景に、「難民文化」とでもいうべきものが誕生している

内藤直樹（ないとう なおき）
民博 機関研究員
専門は生態人類学、地域研究。東アフリカ牧畜社会の制度・組織の可変性・流動性、貧困と開発、紛争・難民問題などに関心がある。著書に『遊牧民』（昭和堂、二〇〇三年）などがある。

難民が生活する屋敷

世界最大の難民キャンプ

ダダーブ難民キャンプは、ケニア共和国・ガリッサ県に位置する世界最大の難民キャンプである。

一九九二年、ケニアの遊牧民ソマリ族の人びとが暮らす小さな町・ダダーブに難民キャンプが建設された。その後キャンプの難民人口は拡大を続け、とくに二〇〇七年の隣国ソマリアでの紛争の激化以降は、ソマリア難民の大量流入による人口過密が深刻化している。二〇〇九年七月の難民キャンプの総人口は、約二九万人であり、そのうちの約九五パーセントがソマリア難民である（UNHCR Sub-Office Dadaab調べ）。これはキャンプが位置するガリッサ県の総人口約二八万に匹敵する。

難民キャンプは水源・水道網、小・中学校、診療所・病院、集会所、市場などのインフラ設備を備えている。一般的なイメージとは異なり、柵で囲われてはいない。しかしながらケニア政府は、難民のケニア国内の自由な移動を禁止している。キャンプの内と外は「見えない柵」で隔てられている。もっとも早く来た人びとは、もう一七年間もの長きにわたって「柵」のなかで暮らしている。

アフリカ難民問題の課題

アフリカ難民問題の課題は、人びとが難民として暮らす状態が長期におよぶ状況にどのように対処すればよいか、明確な答えが出ていない点にある。アフリカの紛争の多くが長期化し、多数の難民を生み出している。だが難民が逃げこむ隣接国は、多数の難民の受け入れには消極的である。

アメリカやカナダなどの先進国が難民を受け入れているが、その数はあまりに少ない。難民たちは帰国することも、別の国に移住することもできないままに、先の見えない暮らしを続けている。しかも、これまで「難民とは一時的な状態」として考えられてきたため、「長期的な視野に立った開発」の対象になることはなかった。

しかしながら近年、難民と難民を受け入れる地域社会の双方を支援の対象とする「難民の地域統合」という考え方が注目されている。だが、それを実現するために、具体的にどのような開発援助が必要とされるのかについては、いまだ試行錯誤が続いている。このようなアフリカ難民をめぐる諸問題を解決するには、「難民として長期間生きる経験」がどのようなものか、その生活の現場から理解することが必要である。

難民キャンプでの暮らし

ダダーブ難民キャンプの人びとは、どのような暮らしをしてきたのだろうか？ 一九九二年からの一七年の間に創られた「難民文化」がいかなるものか理解するために、わたしは二〇〇九年八月にダダーブでの最初のフィールドワークを開始した。

キャンプで知り合いになった青年・モハメドが暮らす居住区を訪ねてみると、意外なほど掃き清められた中庭を中心に母屋、台所小屋とはなれが囲む屋敷で、彼の家族が迎えてくれた。

このときはラマダン（イスラム教の断食月）だったので、残念ながらお昼が出ることは一度もなかった。しかし午後遅くになると、モハメドの母親や姉妹らが台所小屋で夕食の準備をはじめていた。今日の晩ご飯はなにかな？と小屋を覗いてみると、野菜類、ラクダ肉、パスタや香辛料などの豊富な食材をもちいたおいしそうな料理を作っていた。

フェデレーション（federation）という料理

難民は援助機関から小麦・豆・食用油・メイズ・砂糖・塩・粉ミルクなどの配給を受けているが、配給食のみに頼った食生活をすごしているわけではない。このような難民の食をささえるキャンプの市場には食材があふれ、活気に満ちていた。だが降水量が少ないダダーブでは野菜を生産することはできない。また、パスタや香辛料の一部はケニア製ではないようだ。市場に並ぶあふれんばかりの品物はどこからきているのだろうか？

難民がつくる新たな暮らしとネットワーク

モハメドの母親は市場で商店を営んでいる。市場で食材を売っているのはおもに難民の女性である。彼女らはガリッサで野菜を商うケニア人に携帯電話で連絡して、野菜を送ってもらっている。またパスタや香辛料といった商品の一部は、深夜ひそかにソマリアからやってくる。彼女たちはケニアやソマリアの人びととのつながりを利用して得た商品を販売することで現金を得ていた。

一方、男性たちの多くは、手製の三輪車やロバ車による荷運びなどの肉体労働で現金を得ていた。では売るモノがなにもない人びとは、どうしているのだろうか？ ある日モハメドは、私を食糧配給所の前に連れていき、その前に立ち並ぶ臨時の露店を見て言った。「あれは『配給買い取り屋』さ」。買い取られた配給食は、ケニア人に安価で転売される。

ハガデラ市場のメインストリート

難民キャンプは「見えない柵」で隔てられている。しかし人びとの暮らしは、柵の隙間をぬって張り巡らされた難民とケニアの地域住民、ソマリアに残る人びとたちからなるネットワークによって成立していることがわかる。それは決してポジティブな面だけではない。配給食すら販売しなければならない人びとがいることも事実である。

野菜と雑貨を売る女性（ダガハレイ市場）

一部では難民とケニアの地域住民との間に土地利用をめぐる紛争も発生しているとも聞く。生活を再構築する必要があるのは、難民だけではない。県の総人口に匹敵する数の難民を受け入れざるをえない状況に陥ったケニアの地域住民も同様である。

とはいえ、難民とケニアの地域住民は新たなつながりを創り出し、生活を再構築しようとしている。今後は、このような難民と地域社会の人びと双方による生活の再構築にむけた試みや創意工夫を見つつ、「難民の地域統合」の可能性を検討したいと考えている。

携帯は難民生活の必需品（充電屋にて）